

下肢静脈瘤

立つと足の血管が「こぶ」のように膨らみ蛇行するのが下肢静脈瘤の典型的な症状です。

「こぶ」が目立たなくても、長時間立っていると痛い、足がむくむ、疲れやすい、かゆい、湿疹やしみがあふ、こむらがえりがよく起こる…というのも下肢静脈瘤の症状です。

『遺伝、出産、立ち仕事、年齢』と関係があり、親類に静脈瘤がある人が、妊娠後に発症し、立ち仕事に従事しているうちに、年齢とともに進行するというのが典型的です。

女性に多いのですが、男性でも立ち仕事の人は要注意です。

自然に治ることはなく、かゆみ、色素沈着、皮膚炎、静脈炎を繰り返しながら、最後には難治性の皮膚潰瘍になります。

「こぶ」の中で停滞した血液が固まり、それが肺に流れてつまる肺塞栓症は突然死の原因になります。

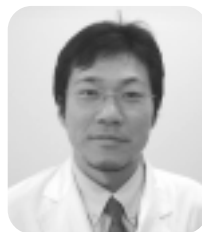
治療は、専用ストッキングの着用、静脈除去術や高位結紮術などの手術、硬化療法（薬を注射して静脈を固める）を組み合わせて行います。外来でできるものから3〜4日の入院が必要なまでの症状と患者様のご希望に合わせて幅広い選択ができます。

思い当たる症状のある方は気軽ににご相談ください。



▲下肢静脈瘤の一例
(右はレントゲン写真)

美濃病院外科



さかもとけんいち 病院長
日本外科学会
(指導医・専門医)
日本消化器外科学会
(指導医・専門医)
日本消化器病学会(専門医)
ほか



むらせかつとし 村瀬勝俊 外科医長
日本外科学会(専門医)
日本消化器外科学会
(専門医)
マンモグラフィー読影医
日本消化器病学会
ほか



せきのせいしろう 関野誠史郎 外科医
日本外科学会(認定医)
マンモグラフィー読影医
日本消化器病学会
日本臨床外科学会
ほか

当院の外科医師は、消化器一般・心血管・呼吸器の3分野を専門とする岐阜大学高度先進外科学講座(旧第1外科)から派遣されています。

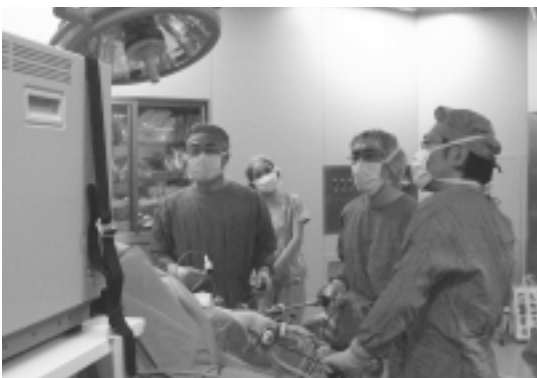
全員が3分野の臨床経験を積んでおり、当院では胃・大腸・肝臓・胆のう・すい臓などの腹部臓器の病気を中心に幅広く診療を行っています。

専門外来では、静脈瘤などの血管疾患、乳がん、痔などの肛門疾患をあつかっており、スタッフ全員が乳がん検診マンモグラフィー読影認定医の資格をもっています。

また、大学スタッフとの連携により、心血管から呼吸器まで幅広い外科医療を提供できる体制が整つ

ており、腹部大動脈瘤を含めた血管手術が当院で施行されています。

現在、日本外科学会専門医研修施設として外科医の育成環境が整った施設としても認定されています。



▲小さな傷で術後の回復も早い内視鏡下外科手術



▲鼠径ヘルニアの手術

鼠径ヘルニア脱腸

太もものつけ根がふくらんでいませんか？ それは脱腸（鼠径ヘルニア）かもしれません。

太ももの付け根を鼠径部といいます。ここにはもともとお腹の壁にすぎ間があり、男性では睾丸へ行く血管や精管（精子を運ぶ管）、女性では子宮を支える靭帯が通っています。

加齢で腹の筋肉が弱ったりして、このすぎ間が大きくなり、腸が外にとび出る状態を「脱腸」（正式な病名は「鼠径ヘルニア」といいます。

外にとび出た腸は通常、横になればお腹の中に引っ込んでしまいます。しかし、この病気の怖いところは、とび出した腸が突然、もとに戻らなくなってしまう場合があることなのです。

この場合、ふくらみが急に硬くなり、押さえても引っ込まなくなり、お腹が痛くなったり吐いたりします。

これをヘルニアの嵌頓（かんどん）という緊急手術が必要になります。数時間以内に対処しないと腸に穴が開く危険性があります。

そのような事態をさけるに早めの治療をおすすめします。

残念ながら脱腸は薬では治りません。治療は唯一大きくなったすぎ間を閉じる手術しかありません。

手術法の進歩により昔と違って、術後の痛み、突っ張り感は少なく、翌日から歩行できて再発率も低い患者様にやさしい治療となっています。

「恥ずかしい病気」のイメージがあるかもしれませんが、思い当たる方は一度ご相談ください。